

前節では、現在の結婚するという選択の状況について見てきたが、本節では、少子化のもう一つの要因である夫婦の出生力の低下に関して、子どもを持つことについての選択における夫婦の意識や生活の周辺にあるものを見ていくこととする。

（子どもを欲しくない夫婦は少ない）

意識調査によると、「理想とする子どもの数」（理想子ども数）が0人の夫婦の割合¹は2.3%とごく少数派であり、「予定している子どもの数」（予定子ども数）が0人の夫婦の割合²も4.3%に過ぎない（国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」（2002年））。

また、子どもがいない、あるいは一人いる35歳未満の妻の場合、75%以上がさらなる出産意欲を持っている。子どもが二人以上いる場合においても、25歳未満の妻では44.4%、25～29歳の妻においても33.0%がさらなる出産意欲を持っている（前掲第1-1-14図）。こうしたことから、子どもを欲しくない夫婦は少数派であることが分かる。

（子どもは生きがいであり、人生に豊かさを与える）

子どものいる人に「あなたにとって子どもとはどのようなものですか。」と尋ねたところ、男性の場合には、「生きがい・喜び・希望」がほかの回答に対する割合に比べて非常に高くなっており、女性の場合には、「生きがい・喜び・希望」とともに「無償の愛を捧げる対象」への回答割合も高い（第1-3-1図）。

また、「子どもを持つことで豊かな人生を送ることができる」と考えている割合は、子どものいない人に比べて子どものいる人の方が明らかに高い（第1-3-2図）。中でも、子育てに手がかかると考えられる時期の親ほど「そう思う」と回答している割合が高く、特に「第一子が小学校入学前の親」では男性で85.6%、女性で79.1%に及んでいる。子育てに手のかかる時期は、負担感も大きいですが、子どもを育てその成長を見守る中で、何にも代え難い充実感や満足感を得ていると考えられる。

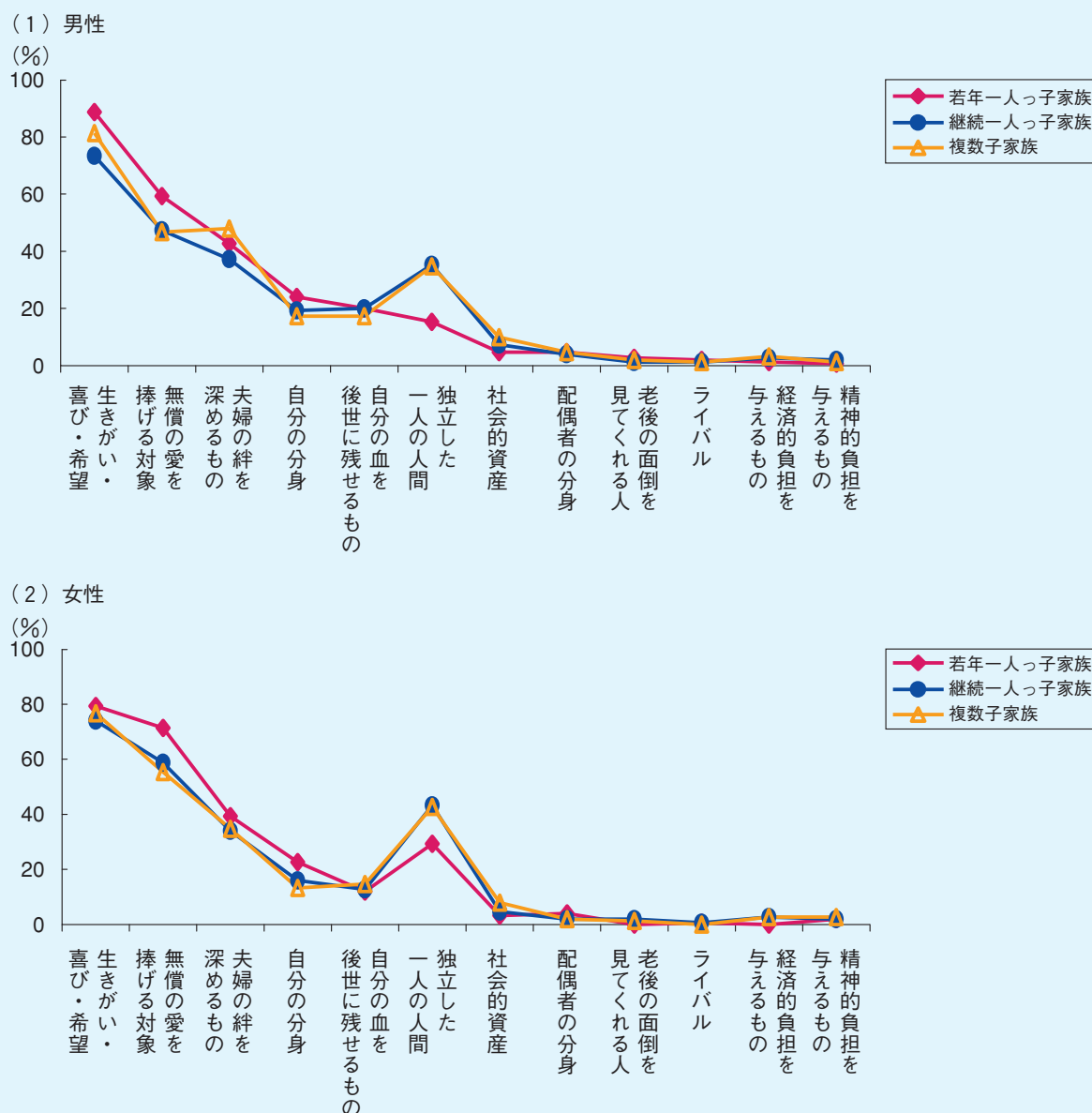
こうしたことは、「子育ては辛いことより楽しいことの方が多い」と考えている割合が子どものいる家族で8割を超えていることからもうかがえる（第1-3-3図）。以上を踏まえると、実際に子どもを持つ人が子育てを楽しく感じ、子育ての中で満足感を得たり、人生に豊かさを感じている状況がうかがわれる。

1 妻が50歳未満、結婚後10年未満の初婚同士の夫婦について算出されたもの（理想子ども数が不詳を除く）。

2 妻が50歳未満、結婚後10年未満の初婚同士の夫婦について算出されたもの（予定子ども数が不詳を除く）。

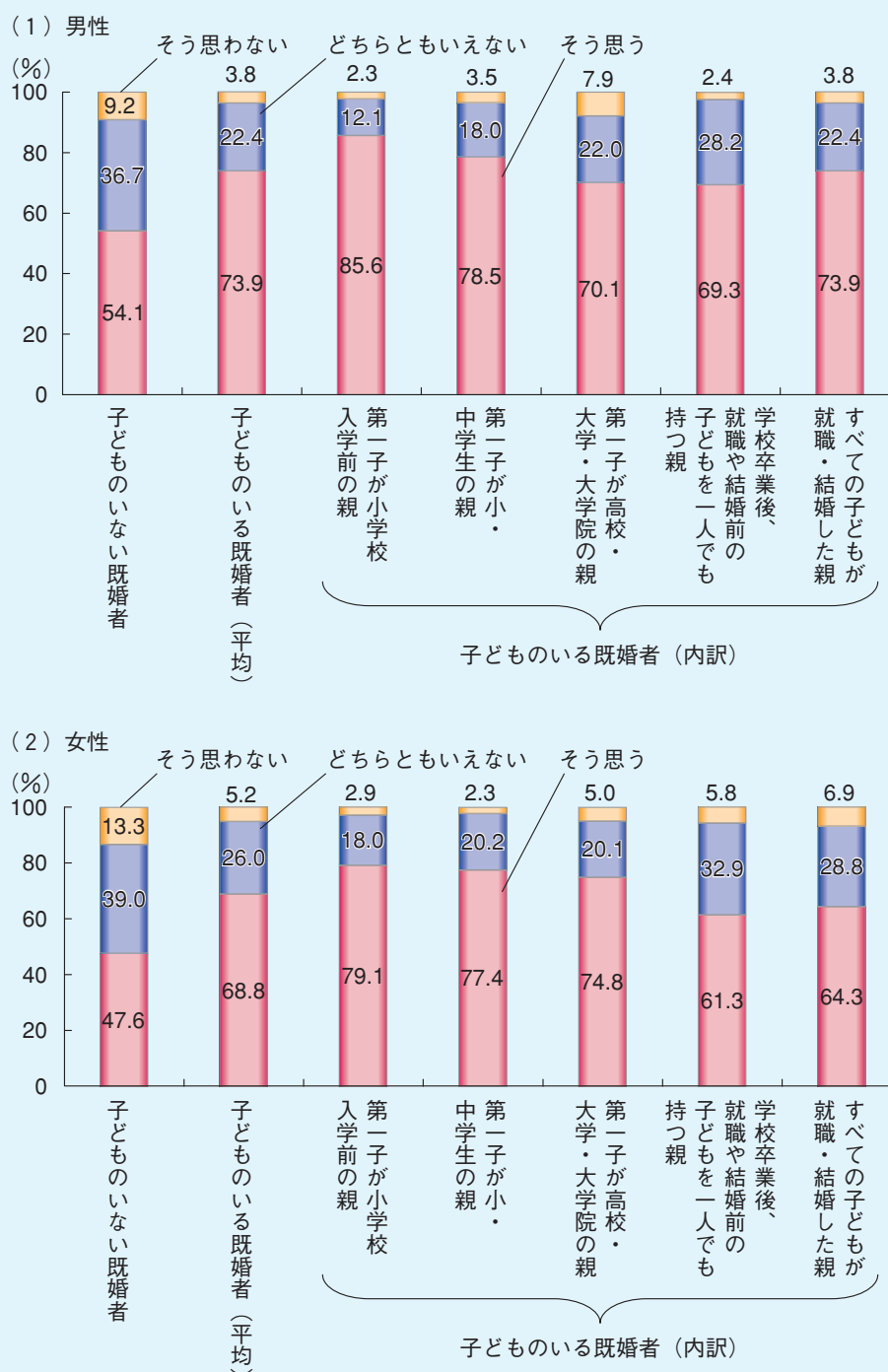
第1-3-1図 子どもは「生きがい」や「無償の愛を捧げる対象」

子どもとはどのような存在か



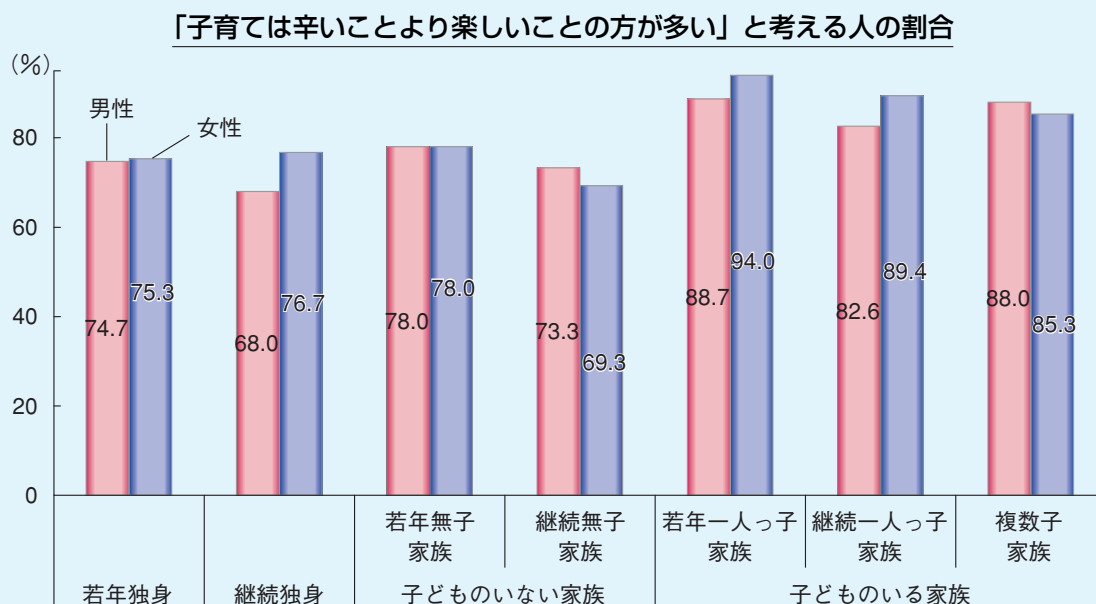
- (備考) 1. 厚生労働省「少子化に関する意識調査」(2004年)により作成。
 2. 「あなたにとって子どもとはどのようなものですか。独身の方も、仮定でお答え下さい。(○は3つまで)」と尋ねた問に対して回答した人の割合。
 3. 選択肢はほかに、「その他」。
 4. 「若年一人っ子家族」の男性は本人20～49歳、妻20～35歳で子どもを一人持つ夫、「継続一人っ子家族」の男性は本人20～49歳、妻36～49歳での既婚で子どもを一人持つ夫、「複数子家族」の男性は本人20～49歳、妻20～49歳で子どもを二人以上持つ夫、「若年一人っ子家族」の女性は本人20～35歳で子どもを一人持つ妻、「継続一人っ子家族」の女性は本人36～49歳で子どもを一人持つ妻、「複数子家族」の女性は本人20～49歳で子どもを二人以上持つ妻をそれぞれ指す。
 5. 回答した人は、いずれのカテゴリーもそれぞれ150人。「その他」は記載を省略。

「子どもを持つことで豊かな人生を送ることができる」と考える人の割合



- (備考) 1. 内閣府「国民生活選好度調査」(2005年)により作成。
 2. 「結婚に関する次のような考え方について、あなたはどのように思いますか。あてはまるものに○をお付け下さい。
 (ウ) 子どもを持つことで豊かな人生を送ることができる。」と尋ねた問に対して回答した人の割合。
 3. 「そう思う」は「全くそう思う」及び「どちらかといえばそう思う」、「そう思わない」は「全くそう思わない」及び「どちらかといえばそう思わない」を回答した人の数をそれぞれ合計。
 4. 回答した人は、全国の15歳以上80歳未満の男性1,306人、同女性1,572人(無回答は除く)。

第1-3-3図 子どもがいる人ほど子どもがいることの楽しさを実感している



- (備考)
1. 厚生労働省「少子化に関する意識調査」(2004年)により作成。
 2. 「あなたは、以下に挙げた意見それぞれについて、どのように思われますか。(○はそれぞれひとつ) ⑤子育ては辛いことより楽しいことの方が多いはずだ」と尋ねた問に対して回答した人の割合。
 3. 選択肢は、「とてもそう思う」、「少しそう思う」、「あまりそう思わない」及び「全くそう思わない」。「とてもそう思う」及び「少しそう思う」と回答した人の合計による。
 4. 「若年独身」の男性は20～32歳の未婚男性、「継続独身」の男性は33～49歳の未婚・死別・離別の男性、「若年無子家族」の男性は本人20～49歳、妻20～31歳で子どもを持たない夫、「継続無子家族」の男性は本人20～49歳、妻32～49歳で子どもを持たない夫、「若年一人っ子家族」の男性は本人20～49歳、妻20～35歳で子どもを一人持つ夫、「継続一人っ子家族」の男性は本人20～49歳、妻36～49歳での既婚で子どもを一人持つ夫、「複数子家族」の男性は本人20～49歳、妻20～49歳で子どもを二人以上持つ夫、「若年独身」の女性は20～30歳の未婚女性、「継続独身」の女性は31～49歳の未婚・死別・離別の女性、「若年無子家族」の女性は本人20～31歳で子どもを持たない妻、「継続無子家族」の女性は本人32～49歳で子どもを持たない妻、「若年一人っ子家族」の女性は本人20～35歳で子どもを一人持つ妻、「継続一人っ子家族」の女性は本人36～49歳で子どもを一人持つ妻、「複数子家族」の女性は本人20～49歳で子どもを二人以上持つ妻をそれぞれ指す。
 5. 回答した人は、いずれのカテゴリーもそれぞれ150人。

(理想の子ども数を持たない最大の理由はお金がかかるから)

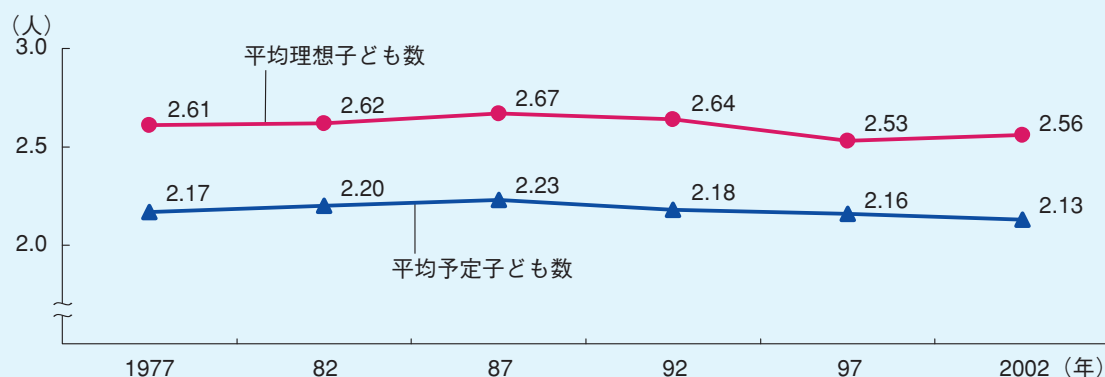
理想子ども数は2002年には2.56人であり、ここ四半世紀の間、それほど大きく変動していない(第1-3-4図)。一方で、夫婦が持とうとする予定子ども数についても同じ期間で大きく変動しておらず、2002年には2.13人となっており、理想子ども数より約0.5人少ない状態が続いている。

では、なぜ理想子ども数より予定子ども数が少ないのだろうか。理想子ども数を持とうとしない妻の理由を見ると、「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」(62.9%)、次いで「高齢で生むのはいやだから」(33.2%)、「これ以上、育児の心理的、肉体的負担に耐えられないから」(21.8%)と続いている(国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」(2002年))。これを妻の年齢を35歳で区切って見ると、「お金がかかりすぎる」との回答は、いずれにおいても高くなっており、特に、35歳未満の妻においては8割近くとなっている(第1-3-5図)。若年層においては、「お金がかかる」ことが子どもを持つことの最大の障害と感じられていることが分かる。

では、何が子育てにおける経済的負担の要因となっているのだろうか。その理由として、「教育のための費用がかかるから」と回答した人の割合は、男女ともに世帯収入が多い人にお

いて高くなる傾向が見られる（第1-3-6図）。また、「世帯収入が少ないから」と回答した人の割合は、実際に世帯収入が少ない人において高い。これらに続いて、「住宅ローンなど住居に費用がかかるから」が挙げられ、収入が500～900万円未満の世帯においてこの回答の割合が高くなっている。このように、高収入世帯を中心に教育費や住居費の負担感が強いことが分かる。また、収入が少ない世帯では、現在の収入状況では子育てをするのに不十分ととらえていると考えられる。

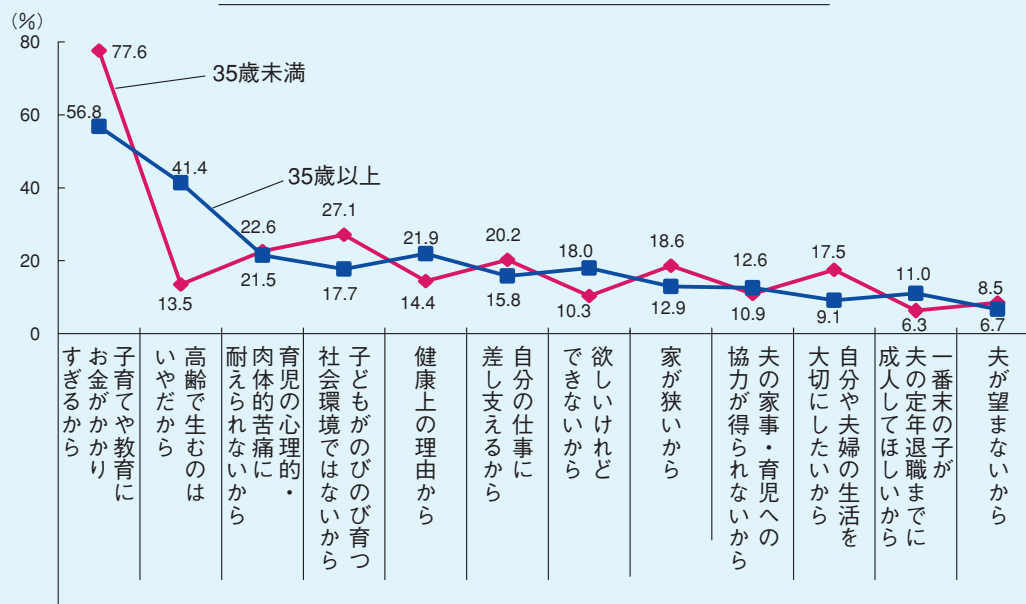
第1-3-4図 乖離のある理想の子ども数と予定子ども数



- (備考) 1. 国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」(2002年)により作成。
 2. 「理想子ども数」は「あなた方ご夫婦にとって理想的な子どもの数は何人ですか。」「予定子ども数」は「あなた方ご夫婦は、これから何人子どもを生むつもりですか。」とそれぞれ尋ねた問に対する回答による。
 3. 回答した人は、全国の50歳未満、初婚同士の夫妻の妻(理想子ども数不詳、予定子ども数不詳を除く)。

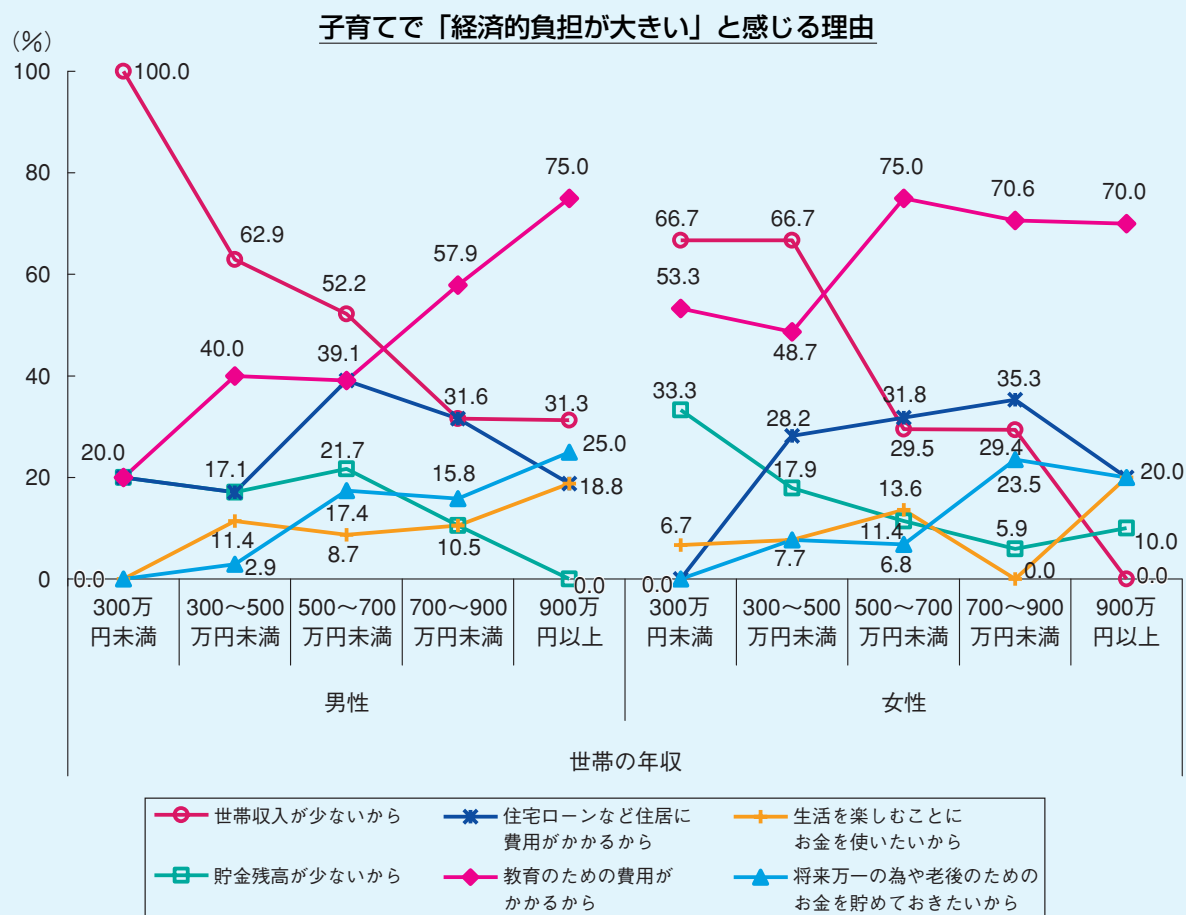
第1-3-5図 妻にとって若年層では子育ての費用が、中年層では年齢が出産のネック

理想子ども数よりも予定子ども数の方が少ない理由



- (備考) 1. 国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」(2002年)により作成。
 2. 子どもの数について、持つつもりの子どもの数が理想的な子どもの数よりも少ない人に対し「持つつもりの子どもの数が、理想とする子どもの数より少ないのはどうしてですか。下の理由のうちから、あてはまる番号すべてに○を付け、最大の理由には◎をつけてください。」と尋ねた問に対して○を付けた人の割合。
 3. 選択肢はほかに、「その他」。
 4. 回答した人は、全国の50歳未満、初婚同士の夫妻の妻2,134人(不詳は除く)。「その他」は記載を省略。

第1-3-6図 教育費がかかることが子育ての経済的負担となっている

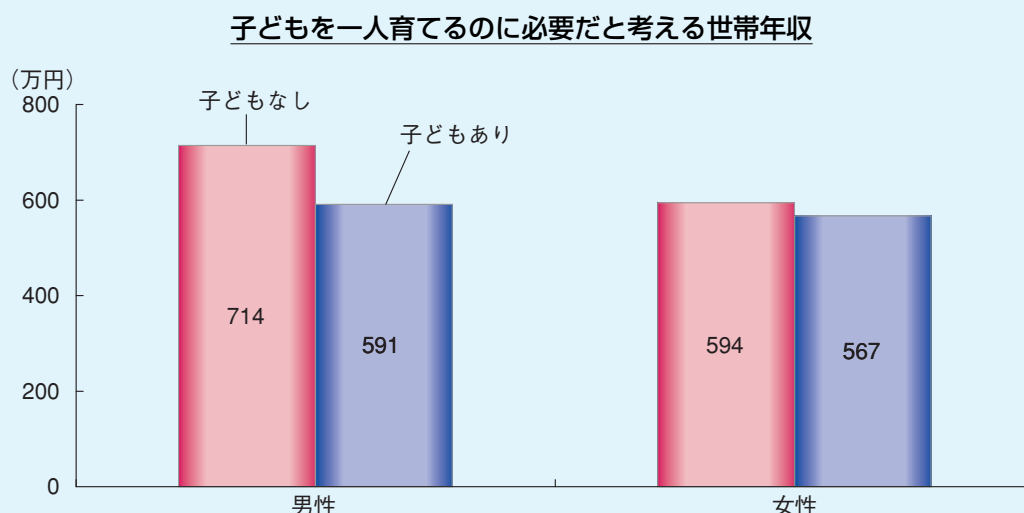


- (備考) 1. 内閣府「国民生活選好度調査」(2005年)により作成。
 2. 「子どもを育てるのに経済的負担が大きい」と回答した人に対して、「そう考える理由について、あなたの考えに一番近いものをお選びください。(○は2つまで)」と尋ねた問に対して回答した人の割合。
 3. 選択肢はほかに、「その他」。
 4. 回答した人は、全国の15歳以上80歳未満の男女であるが、ここでは15歳以上50歳未満の有配偶者のみを集計。男性98人、女性125人(男女ともに無回答を除く)。「その他」は記載を省略。

(子どものいない夫婦は子育てに必要な年収を高く見込みすぎている)

さて、子どもを育てるために最低限どのくらいの収入が必要だと考えられているのだろうか。

子どもを一人育てていくために必要だと考える最低限の世帯年収は、既に子どものいる男性は591万円、女性は567万円と回答している(第1-3-7図)。一方、子どものいない夫婦のうち夫は714万円、妻は594万円を必要最低年収と想定しており、特に男性においては子どものいる場合よりも123万円も高く見積もっていることが分かる。こうしたことから、まだ子どものいない家族においては、「子育てはお金がかかる」との意識が子どものいる家族より強く、子どもを持つことにためらいを感じている面もある。



- (備考)
1. 厚生労働省「少子化に関する意識調査」(2004年)により作成。
 2. 既にある子どもの数と今後予定している子どもの数を合計した子ども数に対して、「(前の間で) お答えの人数の子どもを育てるのに、最低で世帯年収はどれくらい必要だと思いますか。(〇はひとつ)」と尋ねた問に対する回答による。子ども数が「1人」の場合について、子どものいない家族と既に子どもが一人いる家族の場合を比較。
 3. 「子どもなし」の男性とは本人20～49歳、妻20～31歳で子どもなしの夫、同女性とは本人20～31歳で子どもなしの妻、「子どもあり」の男性とは本人20～49歳、妻20～35歳で子どもを一人持つ夫、「子どもあり」の女性とは本人20～35歳の既婚で子どもを一人持つ妻をそれぞれ指す。

(子どもにお金をかけ過ぎていると思いつつも更に増やしたい)

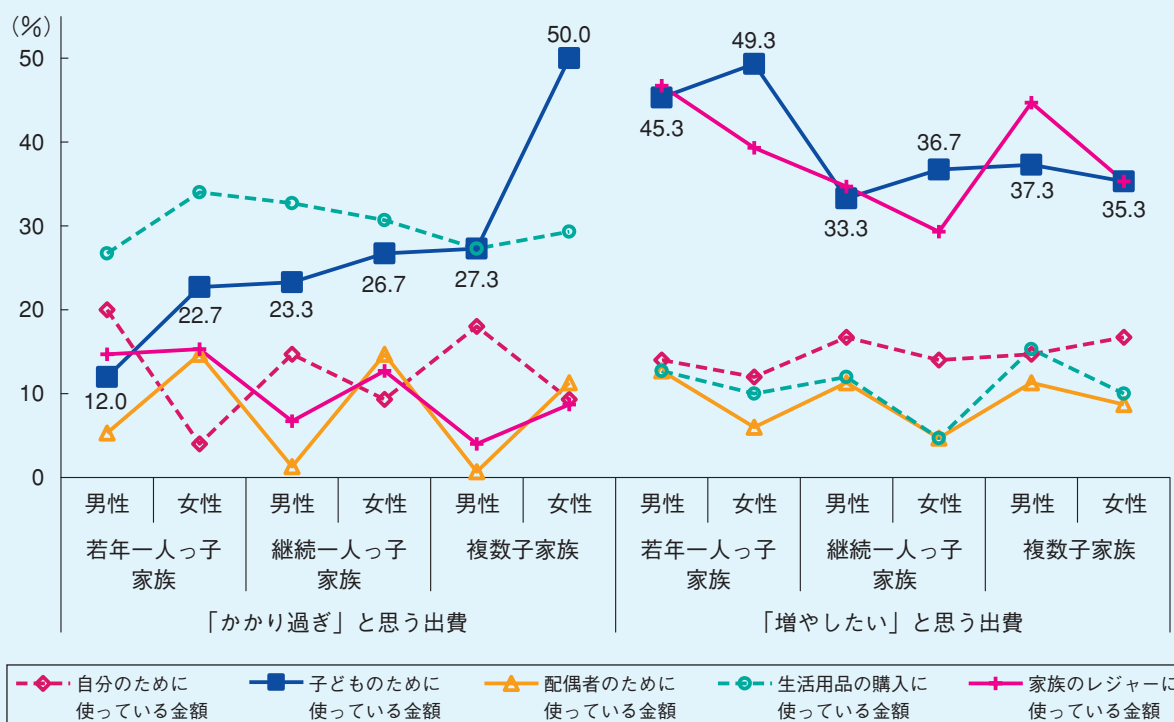
ところで、実際に子育てをしている人たちは、自分自身が子育てのためにかけているお金についてどのように考えているのだろうか。

家計を五つの費目に分けて、まず、現在「かかりすぎ」と思う費目を尋ねたところ、ほぼすべての家族形態において、多くの人が「子どものために使っている金額」を挙げている(第1-3-8図)。特に、子どもが二人以上いる20～49歳の女性の5割が、子どものためのお金がかかりすぎていると感じている。しかし一方で、今後増やしたいと思う費目については、すべての家族形態において高い割合で「子どものために使っている金額」を挙げており、特に子どもが一人だけいる20～49歳の既婚男性では45.3%、子どもが一人の20～35歳の既婚女性では49.3%となっている。かかりすぎだと感じている人が5割に達していた子どもが二人以上いる家族の女性についても、35.3%の人が今後増やしたいと思っている。子どものため以外の費目においては、かかりすぎだと感じていれば今後増やしたいと考えない、あるいはかかりすぎでないと感じていれば今後増やしたいと考えていることと比べて特徴的であろう。

子どもの数と子育てにかかる費用についての意識を見ると、「子どもの数を少なくし、可能な限りお金をかけて育てる」を選択した割合は男性13.5%、女性20.3%であり、「ぜいたくはさせられないが、兄弟姉妹が大勢いる環境で育てる」を選択した割合(男性57.9%、女性45.9%)と比べてかなり低い(第1-3-9図)。また、「子どもの数にかかわらず、子育てにそれほどお金をかける必要はない」及び「ぜいたくはさせられないが、兄弟姉妹が大勢いる環境で育てる」と考えている割合の方が高く、先に見た「子どものために使っている金額」への感じ方の結果と合わせて考えると、子育てのお金はやむを得ずかかってしまうと認識しているものと考えられる。

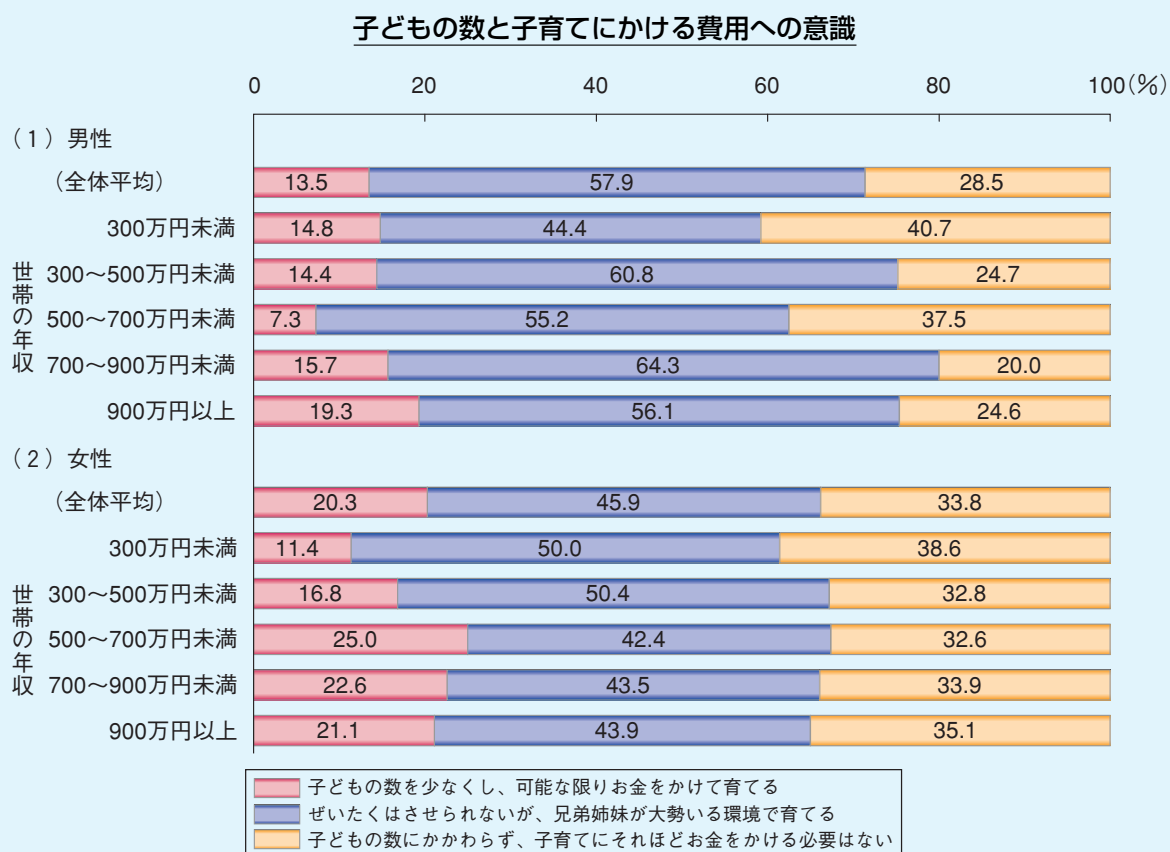
第1-3-8図 かかり過ぎているとは感じつつも、増やしたい子育て費用

「現在かかり過ぎ」と感じる費用、「今後増やしたい」と考える費用



- (備考)
- 厚生労働省「少子化に関する意識調査」(2004年)により作成。
 - 「以下の①②について、あてはまるものをすべてお答え下さい。(○はそれぞれいくつでも) ①現在、「かかりすぎ」と思う出費は…②今後、「増やしたい」と思う出費は…」と尋ねた問に対してそれぞれ回答した人の割合。
 - 選択肢はほかに、「特にない」。
 - 「若年一人っ子家族男性」とは本人20～49歳、妻20～35歳で子どもを一人持つ夫、「若年一人っ子家族女性」とは本人20～35歳で子どもを一人持つ妻、「継続一人っ子家族男性」とは本人20～49歳、妻36～49歳での既婚で子どもを一人持つ夫、「継続一人っ子家族女性」とは本人36～49歳で子どもを一人持つ妻、「複数子家族男性」とは本人20～49歳、妻20～49歳で子どもを二人以上持つ夫、「複数子家族女性」とは本人20～49歳で子どもを二人以上持つ妻をそれぞれ指す。
 - 回答した人は、若年一人っ子家族男性143人、若年一人っ子家族女性146人、継続一人っ子家族男性146人、継続一人っ子家族女性146人、複数子家族男性149人、複数子家族女性148人。「特にない」は記載を省略。

第1-3-9図 「少数の子どもにできる限りのお金をかけて子育てをする」と考えている人は少ない



- (備考) 1. 内閣府「国民生活選好度調査」(2005年)により作成。
 2. 「子どもの数と子育てにかかる費用の関係について、あなたの考えに一番近いものをお選び下さい。(○は1つ)」と尋ねた問に対して回答した人の割合。
 3. 選択肢はほかに、「わからない」。
 4. 回答した人は、全国の15歳以上80歳未満の男女であるが、ここでは、15歳以上50歳未満の有配偶者のみを集計。男性347人、女性414人(男女ともに「わからない」及び無回答は除く)。

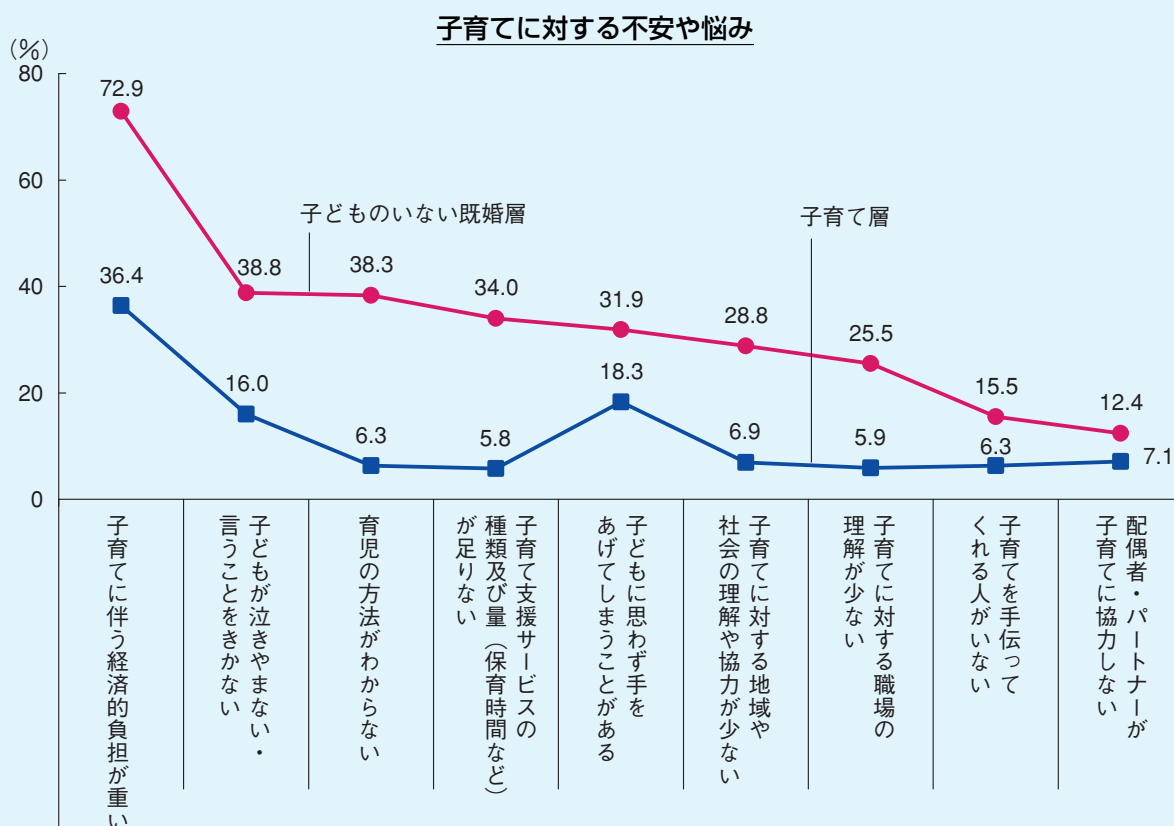
(子どものいない夫婦は子育てに過剰な不安感を抱いている)

子育てにおける心理的な負担感について見てみよう。子育てにおける不安や悩みに対する意識調査によると、子どものいない夫婦の場合、先に見た経済的負担に関すること以外に、「子どもが泣きやまなかったり言うことをきかなかったりするのではないか」、「育児の方法がわからないのではないか」、「子育て支援サービスの種類及び量が足りないのではないか」、「子どもに思わず手をあげてしまうことがあるのではないか」といった、子育てにおいて直面する可能性のある様々な状況を不安に思っている(第1-3-10図)。一方、実際に子育てをしている夫婦は、「子どもの病気や発育のこと」、「子どもと過ごす時間や会話が少ない」など、日常的な課題に関するものが多いものの、子どもがいない夫婦が持っているような不安や悩みについてはそれほど多く感じていない。

様々な困難に直面して子どもが持てない人もいようが、上で見たように子どものいない夫婦は、実際の子育てに対する具体的なイメージが持てないことによって、子育てに対して過剰な不安感を抱いており、それが産み控えの要因の一つになっていると考えられる。

なお、経済的・心理的な負担とともに、子どもを持つことには様々なリスクが付随することにも留意すべきである。妊娠・出産の医学的リスクや、子どもの病気やけが、あるいは配偶

第1-3-10図 子どものない夫婦は子育てに対して負担感を強く抱いている



- (備考) 1. 財団法人子ども未来財団「子育てに関する意識調査」(2004年)により作成。
2. 子育てをしている人に対し「子育てにあたって不安や悩みに思っていることはどのようなことですか。あてはまるものすべてをお選びください。」、子どものない人に対し「あなたが、将来の子育てについて不安に思っていることはどのようなことですか。あてはまるものすべてをお選びください。」とそれぞれ尋ねた間に対して回答した人の割合。
3. 選択肢はほかに、「その他」及び「特にない」。また、子育てをしている人に対しては、ほかに「子どもの病気や発育のこと」、「子どもと過ごす時間や会話が少ない」、「子どもとどう接したらよいかわからない」、「子育てについての相談相手がない」、「子育てをしていて孤立感が強い」の選択肢も加えられている。
4. 「子どものない既婚層」とは18～29歳、30～35歳、36歳以上の子どもなしの既婚者、「子育て層」とは子どもの年齢が0歳から高校生に含まれる父親又は母親をそれぞれ指す。
5. 回答した人は、子どものない既婚層の男性209人、同女性211人、子育て層の男性564人、同女性602人。「その他」及び「特にない」と、子育てをしている人に対する選択肢(「子どもの病気や発育のこと」、「子どもと過ごす時間や会話が少ない」、「子どもとどう接したらよいかわからない」、「子育てについての相談相手がない」、「子育てをしていて孤立感が強い」)及び無回答についても記載を省略。

者と離別・死別したときの貧窮化リスクなど、誰しものが直面するわけではないが、生じたときには大きな負担をもたらす要因は多く、これらも産み控えの背景となっている可能性がある。

(子育てをしている女性は自由な時間が持てないことを負担に思っている³⁾)

それでは、実際に子育てをしている夫婦はどのような心理的な負担感を持っているのだろうか。

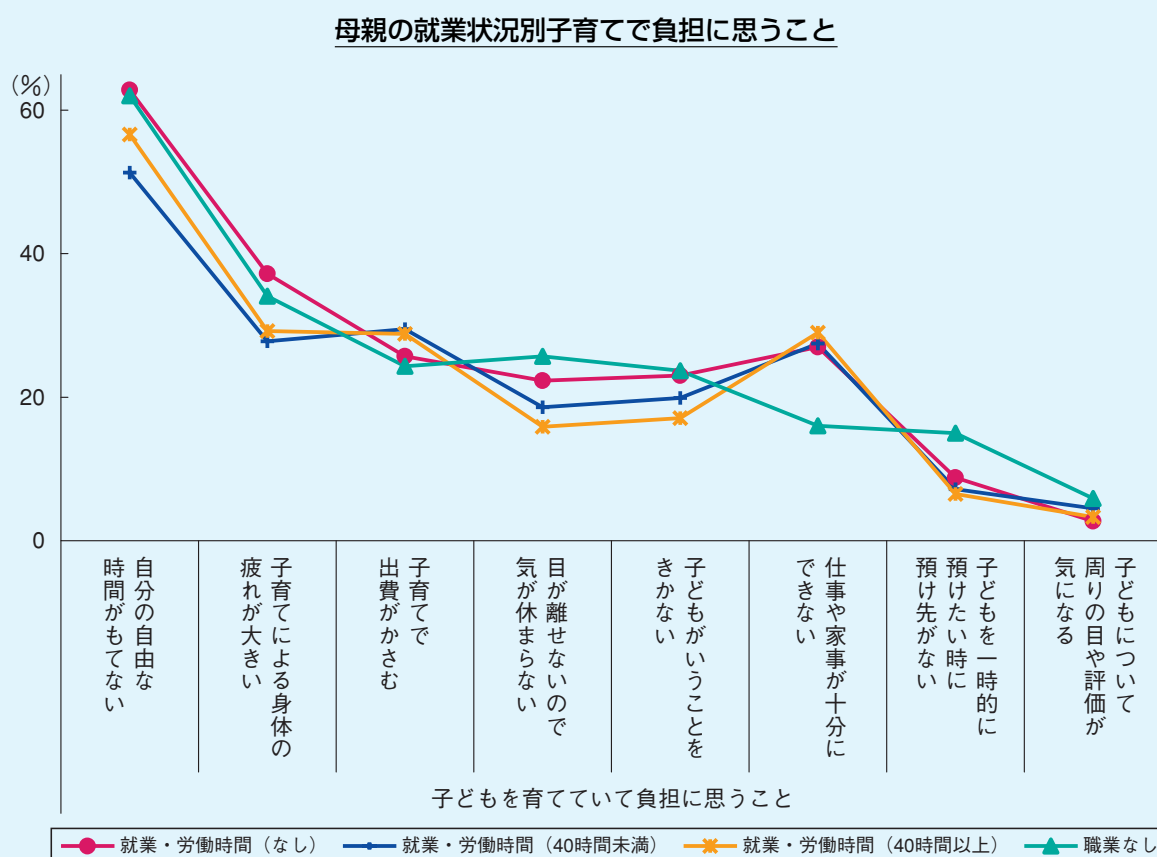
子どもを育てていて負担に思うことについては、「自分の自由な時間が持てない」との回答が最も多く、続いて、「子育てによる身体の疲れが大きい」、「子育てで出費がかさむ」、「目が

3 なお、子育てにおける時間に関する負担感については第3章第4節でより詳しく取り扱う。

離せないで気が休まらない」などとなっている（第1-3-11図）。なお、このうち「自分の自由な時間が持てない」、「子育てによる身体の疲れが大きい」、「目が離せないで気が休まらない」については、働いている女性よりも、むしろ専業主婦が若干強く負担を感じているとの結果が得られている。すなわち、仕事と子育ての時間のやりくりに腐心する働く女性に大きな負担感があるのはもちろんだが、専業主婦は常に注意を払わなければならない子どもと毎日かつ長時間接しているばかりでなく、体や気を休めることができにくい状況にあることが、子育ての様々な負担感を大きくしていると考えられる。

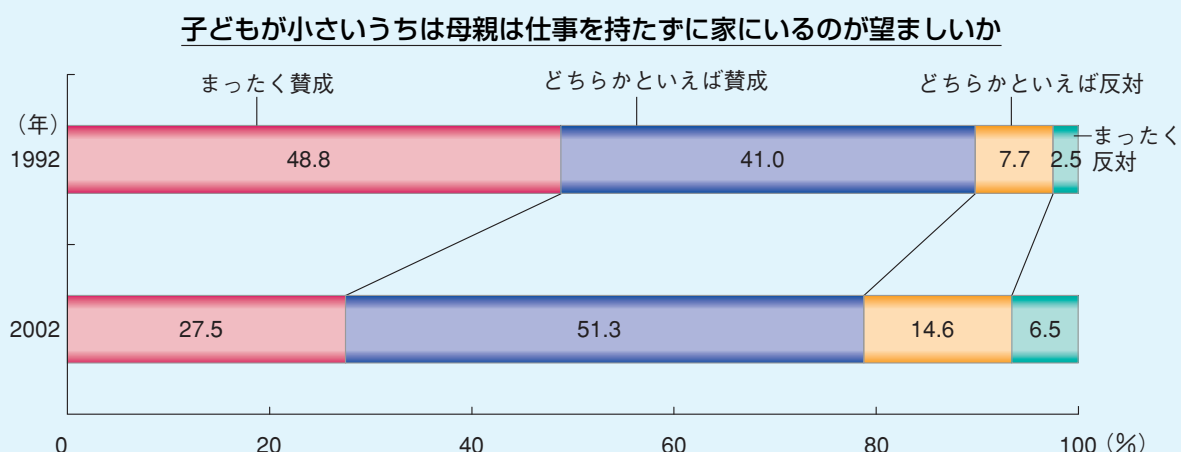
ところで、「少なくとも子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たずに家にいるのが望ましい」という考えに対して賛成する人（「まったく賛成」及び「どちらかといえば賛成」）の割合は、2002年で78.8%となっている（第1-3-12図）。1992年の89.8%から10%ポイント以上低下しているとは言え、子育て期にある母親は仕事よりも子どもを優先し、自分で子育てをするべきという意識が依然として強いことが分かる。

第1-3-11図 子育てで一番負担に感じているのは「自由な時間が持てない」こと



- （備考）
- 厚生労働省「21世紀出生児縦断調査」（2003年度）により作成。
 - 2歳6カ月の子どもについて、「平成13年1月／7月生まれのお子さんを育てていて負担に思うことや悩みについておたずねします。あてはまる番号すべてに○をつけてください。」と尋ねた間に対して回答した割合。その子どもの母の就業状況ごとに集計（なお、上記の項目は、全体での平均値で見たときの割合の高い順に示した）。
 - 選択肢はほかに、「配偶者が育児に参加してくれない」、「しつけの仕方が家庭内で一致していない」、「子どもをもつ親同士の関係がうまくいかない」、「子どもが病気がちである」「子どもが急病のとき診てくれる医者が近くにいない」、「子どもの成長の度合いが気になる」、「しつけの仕方がわからない」、「子どもを好きになれない」、「その他」及び「負担に思うことや悩みは特にない」。
 - 全国の2001年1月10～17日及び7月10～17日の間に出生した子のすべてを調査対象としその子どもが2歳6カ月となった2003年8月1日（1月生まれの子どもの）及び2004年2月1日（7月生まれの子どもの）における状況について調査しており、回答したのは母と同居している41,918人の子の親など（負担に思うことや悩み、労働時間、就業の有無の不詳はそれぞれ除く）。ほかの選択肢への回答状況については記載を省略。

第1-3-12図 「子どもが小さいうちは母親が家にいるのが望ましい」という意識は依然として強い



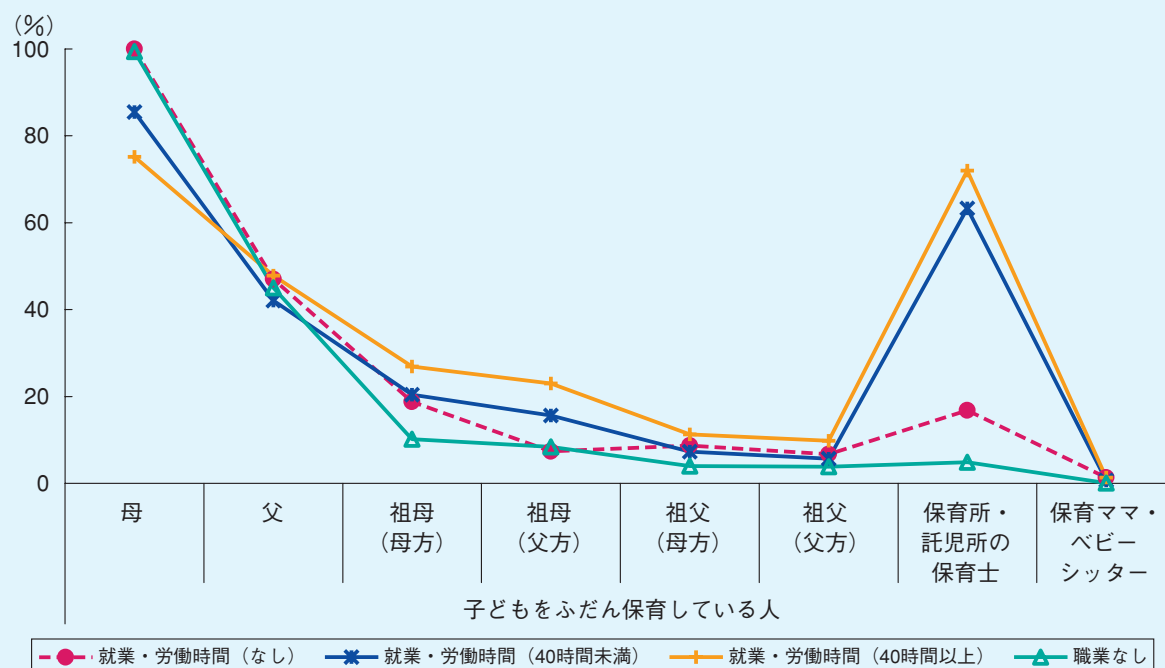
- (備考) 1. 国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」により作成。
 2. 「次のような考え方に対して、あなたはどのようにお考えでしょうか。下のa～iのそれぞれについて、あてはまる番号に○を付けてください。h少なくとも子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たずに家にいるのが望ましい」と尋ねた問に対して回答した人の割合。
 3. 回答した人は、全国の50歳未満、初婚同士の夫妻の妻で、1992年8,675人、2002年6,738人（いずれも不詳は除く）。

そうした意識も反映して、子どもの母親が専業主婦の場合においては、子どもをふだん保育している人は子どもの母親と回答した世帯の割合は99.7%となっており、外部の人に保育を依頼する割合が低くなっている（第1-3-13図）。また、一時保育やベビーシッターの利用状況も専業主婦の利用率は低水準である（第1-3-14図）。一方、働いている女性においては、ふだんの保育者として子どもの祖母や保育所の保育士も挙げている人が多い。

子育てをしている女性、特に専業主婦においては、子育てにすべてを費やさなければならないといった意識から離れて、必要に応じて周囲の助けを得ても良いという意識が広がることで、自由な時間を持つなどの心理的な余裕も生み出せるようになり、子育ての負担感が軽減されていくと考えられる。

第1-3-13図 専業主婦は子育てに他人の助けを頼まない傾向が強い

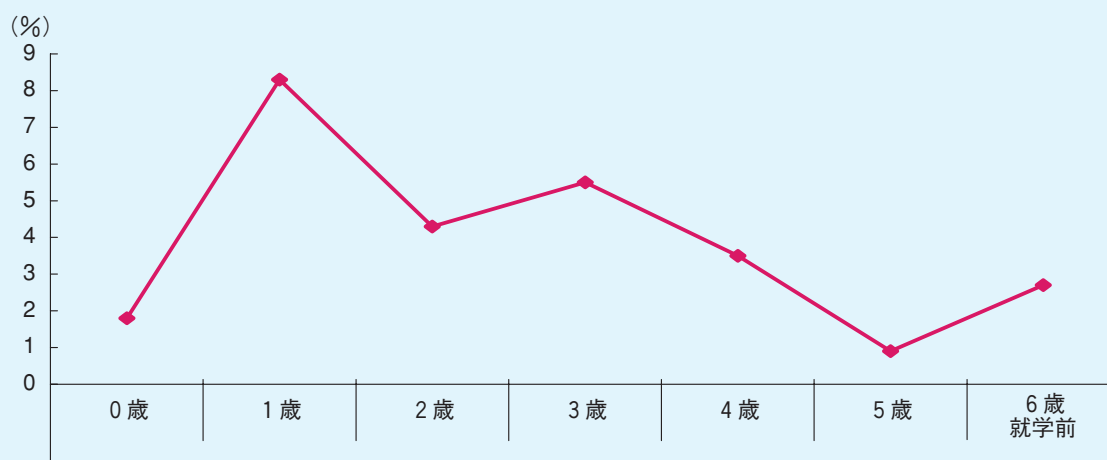
母親の就業状況別 子どものふだんの保育者は誰か



- (備考)
- 厚生労働省「21世紀出生児縦断調査」(2003年度)により作成。
 - 2歳6カ月の子どもについて、「平成13年1月／7月生まれのお子さんのふだんの保育はどなたがしていますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。」と尋ねた問に対して回答した割合。その子どもの母の就業状況ごとに集計。
 - 選択肢はほかに、「その他」。
 - 「母」は子どもの「お母さん」、「父」は子どもの「お父さん」をそれぞれ指す。
 - 全国の2001年1月10～17日及び7月10～17日の間に出生した子のすべてを調査対象としその子どもが2歳6カ月となった2003年8月1日(1月生まれの子ども)及び2004年2月1日(7月生まれの子ども)における状況について調査しており、回答したのは母と同居している42,200人の子の親など(労働時間、就業の有無、ふだんの保育者不詳はそれぞれ除く)。「その他」への回答状況については記載を省略。

第1-3-14図 専業主婦で一時保育・ベビーシッターを利用する人の割合は少ない

専業主婦の母親の一時保育・ベビーシッター利用割合



- (備考)
- 財団法人こども未来財団「子育てコストに関する調査研究」(2003年)により作成。
 - 調査対象は就学前の子どもを持つ母親で、回答者数はうち無職の母親779人。
 - 幼稚園・保育園関連費のうち、ベビーシッター・一時保育費を「利用している」と回答した人の割合。